

主体的に活動する力をはぐくむ学習指導

—自分たちのハーモニーをつくろう—

県立奈良高等学校 教諭 山 白 育 枝

Yamahaku Ikue

要 旨

芸術科「音楽Ⅰ」の合唱の単元を通して、より一層生徒の主体的、意欲的な取組が図られるよう、生徒たち自身で楽曲をつくり上げる難しさと喜びを、授業の中で感じさせる効果的な指導法を探った。

キーワード： 探求、工夫、協力、表現

1 はじめに

幼少時から、多くは個としての音楽を学んできた生徒たちに、それぞれの感性を調和させて表現する合唱の授業は、ともすれば教員主導になりやすい。生徒自身が主体的に活動する中で、課題を見付け、互いの音楽性を認め、高め合えるような指導方法を研究した。また、心では感じているが自己表現しにくい、という生徒に、音楽づくりを通して主体的に活動する力をはぐくむための学習指導について考察した。

2 研究目的

生徒一人一人が心に描く美しいハーモニーのイメージを具体化し、お互いの個性や感性を認め合い、よりよい音楽（合唱）を作り上げるために、主体的に取り組む学習活動の在り方について研究した。

3 研究方法

- (1) 混声合唱「奈高賛歌」、「あいたくて」を、講座単位で指揮者・ピアニスト・パートリーダーを中心に、主体的に活動する学習指導の立案
- (2) 生徒一人一人がもつ美しいハーモニーのイメージを具体化するために、それぞれの所属するパート、あるいは講座全体で積極的に音楽づくりをするための方法の考察

4 研究内容

- (1) 混声四部合唱「奈高賛歌」、混声三部合唱「あいたくて」を、講座単位で指揮者・ピアニスト・パートリーダーを中心に、主体的に活動する学習指導の立案

「奈高賛歌」は、本校創立70周年を記念して、当時の在校生が作詞・作曲した合唱曲で、それ以来、毎年1年生の講座で歌い継がれてきている第2の校歌ともいべき曲である。歌詞には、校内の風景が描かれ、生徒たちには感情移入しやすい曲である。また、「あいたくて」は、工藤直子

作詞の生徒に親しみやすい歌詞と、木下牧子作曲の流れるようなメロディーが美しい曲である。「奈高賛歌」は、創立80周年記念式典のときに全員で合唱したもの（DVD）を鑑賞させ、先輩たちが歌う姿を見ることで意欲を喚起させた。また「あいたくて」は、一流の合唱団の演奏を聴かせて、合唱のよさを感じさせた。

まず、パートは各自の希望で分かれるが、アンバランスにならないように生徒たちに工夫させた。次に、曲の音取りが大まかにできた段階で、指揮者・ピアニスト・パートリーダーを決めさせ、このメンバーでのミーティングを行い、どんな合唱曲に仕上げたいか、方向性をもたせた。さらに、そのミーティングの結果を各パートにもち帰り、パートリーダーを中心に全員で練習目標を考えさせた。その目標に従って、パート練習に取り組みせ、教員は、パートを回り仕上がり状況を把握するとともに、技術的なアドバイスをを行った。また、早い段階から積極的に音を合わせ、録音することで、よりよい演奏への意欲を高める効果をねらった。

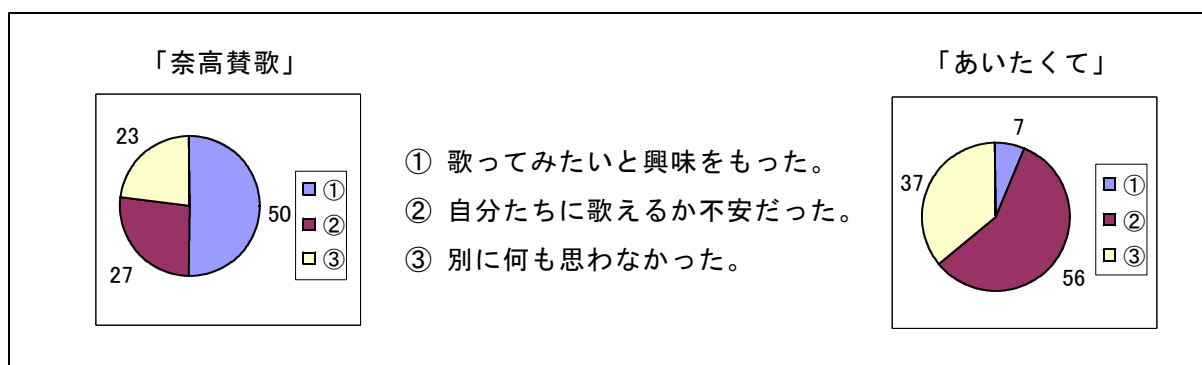
- (2) 生徒一人一人がもつ美しいハーモニーのイメージを具体化するために、それぞれの所属するパート、あるいは講座全体で積極的に音楽づくりをするための方法の考察

前時の録音を聴き、各パートの生徒同士で話し合い、全体練習で合わせたときの問題点を発表させた。そして、解決に向けてパートを越えて話し合わせ、指揮者は、どんなイメージで曲を仕上げたいのかを具体的に全体の生徒に伝えさせた。一方で、ピアニストとの音楽づくりの連携を図るため二者の練習を深め、教員は、各パート練習巡回の際に、パートリーダーからの一方的な指示にとどまらず、各自がそれぞれの問題点を意識して歌えるよう働きかけた。

5 研究結果と考察

- (1) 混声四部合唱「奈高賛歌」、混声三部合唱「あいたくて」を、講座単位で指揮者・ピアニスト・パートリーダーを中心に、主体的に活動する学習指導の立案

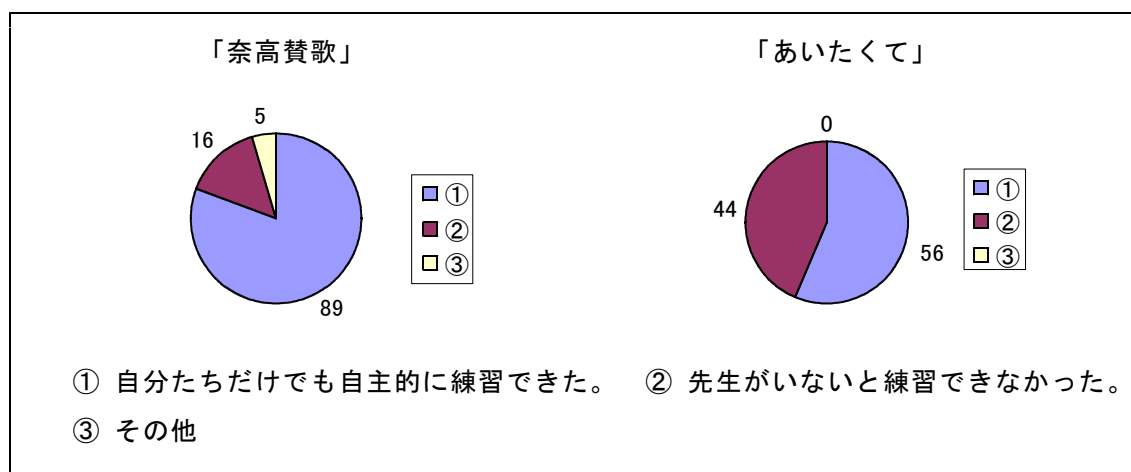
発表後に行ったアンケートによると、「奈高賛歌」に対する第一印象は、“歌ってみたい”と興味をもった生徒が多かったものの、自分たちに歌えるのかどうか不安に思った生徒も多かった。「あいたくて」に対しては、本格的な合唱曲を聴いた経験の無い生徒も多く、“不安に思った”と“別に何も思わなかった”と答えた生徒が多かった。



グラフ1 「曲を初めて聴いたときの印象」

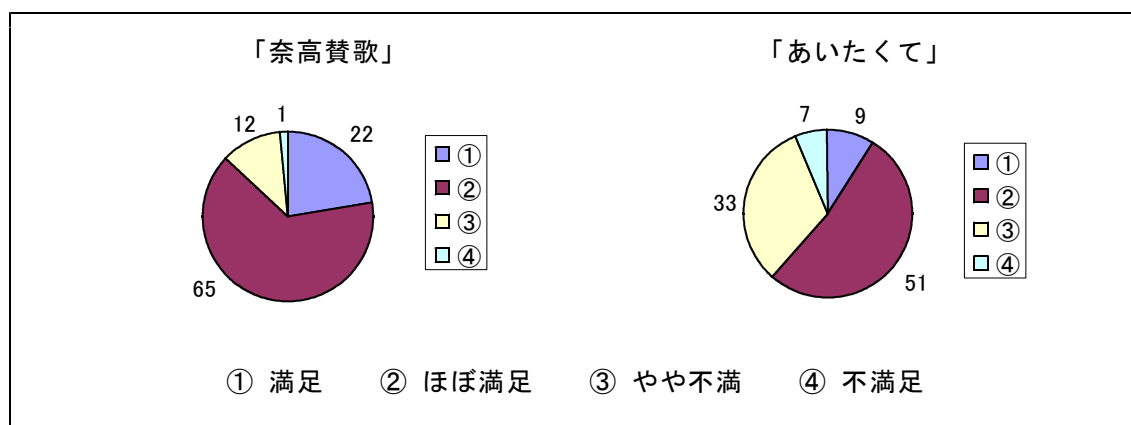
このような意識の生徒に、積極的に歌わせるには、何よりもそれぞれの曲を好きになってもらわなければならない。最初は、音程や歌詞にこだわらず、とにかく自分のパートを自信をもって歌え

るようパート練習に時間を割いた。パート練習は、できるだけ生徒たちだけで自主的に課題を見付け、練習するようにした。アンケートの結果からも、生徒たち自身、自主的に取り組めたと感じていることがわかった。(グラフ2より)



グラフ2 「曲に取り組んでみて感じたこと」

また、ある程度音程が定まった段階で、合わせ練習を取り入れ、合唱する楽しさや難しさを感じさせた。また、指揮者には、指揮法の指導とともに曲の流れを中心に、どんな曲に仕上げたいのかを具体的に考えさせた。しかし「あいたくて」は、思ったより音取りに時間がかかり、合唱の時間が足りず十分深めた取組をすることができなかった。生徒のアンケートの結果も、「奈高賛歌」に比べるとやや不満足というのが多かった。



グラフ3 「最後の録音は満足できたか」

次回は、もう少し早い段階から合唱に取り組み、生徒が満足できるように、余裕をもって仕上げたい。また、2曲とも男子のパートは自分たちで十分練習ができる講座と、教員がいないと練習できない講座の差が大きく、仕上がりに差の出る結果となった。指揮者・ピアニスト・パートリーダーのリーダーミーティングは、少人数なので意見が出やすく、それぞれの思いが伝わりやすかった。そこで、話し合った内容をパートにもち帰り工夫する方法は、よりよい音楽づくりに効果的で、今後も取り入れていきたい。

(2) 生徒一人一人がもつ美しいハーモニーのイメージを具体化するために、それぞれの所属するパート、あるいは講座全体で積極的に音楽づくりをするための方法の考察

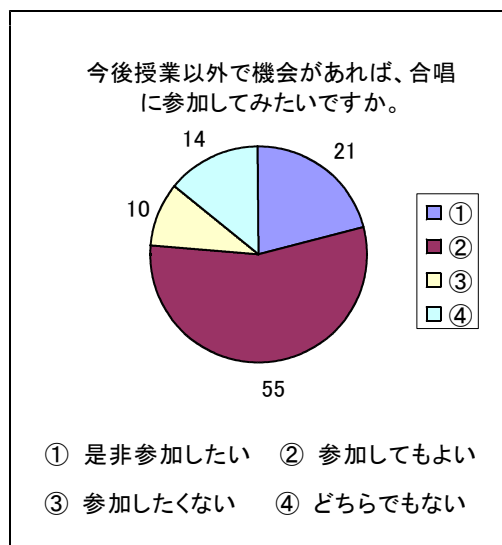
パート練習と合唱練習・録音を繰り返すことで現れる問題点に気づき、それを各パートで、自分たちの力でより良い合唱曲にしていく姿勢を身に付けられるように配慮した。また、練習が進むにつれてより正確な音程で歌うことの大切さや、歌詞をはっきりと歌うこと、各パートのバランスの大切さなどに自ら気付くことのできる生徒が出てきた。その気づきを全体で共有させるために、各時間の最初に今日の目標を各パートで発表させたことも、全体の意識を高めるのに役立った。

6 おわりに

本格的な合唱への取り組みは今回が初めてである、という生徒が多い中、合唱に適した声づくりから始めた。地声を押さえることで、全体が美しい合唱になる、ということに多くの生徒が気づき、積極的に声づくりに取り組めるようになったのも、大きな収穫であった。

また、歌うことに対して苦手意識をもち、消極的であった生徒が、歌うことの楽しさを味わえた、というアンケートの回答は、まさに合唱の力ではないだろうか。一人で歌うのは楽しい、仲間と歌うのも楽しい、でも多くの仲間とともに作り上げる合唱はもっと楽しい。

アンケートの最後に、これから授業以外で合唱する機会に出会ったときに参加してみたいか、と尋ねたところ多くの生徒が「是非参加したい」、「参加したい」と答えてくれたことは、今後、合唱の授業に取り組む上での大きな励みとなった。これからも、生徒が意欲をもって歌える教材選びや、分かりやすい発声法の研究など、合唱から広がる研究を続けていきたいと考えている。



グラフ4